

「言語過程説」とソーシャル批判について

魏 育 鄰

要約

「語言過程說」和索緒爾批判

魏 育鄰

可以說，時枝誠記博士在建立其「語言過程說」時，是從批判索緒爾理論入手的。一般認為，這是由於他誤解了索緒爾理論。本文無意過多涉及此問題，只是想說明他的批判索緒爾，是有著其內在原因的。這就是：

一，在對於歐洲語言學理論和日本傳統的國語學的關係問題上，時枝持辯證的態度。即認為並非歐洲語言學理論方具有普遍意義，而日本傳統的國語學只具有特殊意義。

二，在把握語言的本質的方法上，時枝也與索緒爾有著明顯的不同：前者把語言當作一個連貫的「過程」來把握；後者則把語言分成若干個部分。

三，在界定語言本質時，時枝始終認為語言是人的主體活動；而索緒爾則着眼於作為主體活動的結果的「語言」。

四，本文同時想順便說明這樣一個問題：我們不應該用今日的標準來要求當時的時枝。如果說時枝當時對索緒爾有所誤解的話，應當說這並非他一個人的問題。同時，一種理論隨着時間的推移客觀產生的影響，也是需要加以具體分析的。

最後贅言一句：本文是幾年前在中國國內寫成的，因此，所能利用的資料無疑是極有限的。在此謹請行家們諒解。

時枝誠記博士はその「言語過程説」を展開するにあたって、フェルディナン・ト・ソシュールの言語理論に対する批判を手がかりとしたのであるといえよう。もとより、一つの理論を批判することによって、いま一つ新しい理論を確立することは、学問的方法論としては便宜である。但し、問題が当時の歴史的状況及びこの二つの理論における理論的構造にあることはいうまでもない。そこで、もし時枝がなぜソシュール批判を通して、言語過程説の理論的展開をしたかを問うならば、その当時の歴史的状況についての、手元に利用できる資料が極く限られたものしかない状態にあるので、目下可能なことは、主として言語過程説の理論的展開を考察し、それがソシュール理論との理論的構造の相違を究明することによって、この問題に接近するよりほかない。このような仕方は、私自身にとっては方法論的意義をもつほどでもない。むしろ、さしあたりの事情に即して、然らざるを得ないことであるといつてさしつかえない。と、ことわっておきながら、いよいよ本論に入りたい。

—

ソシュールの言語学理論は言語学の代表的なものとして、明治以後の日本の言語研究に大きな影響を及ぼしたに違いない。就中、橋本進吉博士が「近來の言語学では言語と言語活動との二つを考える説が有力である。」また「我々の心の中に存する言語観念と、言語活動によってその場合に実現せられた実際の（具体的の）言語とは、音に於いても意味に於いても必ずしも同一のものでない故、之を區別して考える必要がある。」¹⁾ といっているのが、まったくソシュール理論の日本への伝達といってよい。

ところで、当時のこういう状況のもとに、時枝のソシュール批判は、実際的には、橋本理論やその他の日本の言語理論に対する批判である。といっても別に間違いでもないが、しかし、こういうのは皮相的であって、あくまでも第二次的な目的をいっているにすぎないのである。事実、時枝のソシュール批判は、何よりも氏の言語学に対する態度にもとづくものである。時枝のその態度はなにものであるかといえば、まず、氏は言語学と国語学との関係について、「言語学が我が国に輸入せられた時、それは国語学と極めて特殊な関係に於いて結ばれたのである。」こういう関係は「変則的な関係」であって、「言語学は国語を外部より推進する處の指導原理であるかの如き観念を強く生み付けてしまったのである。」²⁾ といっている。ここから、時枝の言語学と国語学との不適當な関係への強い反発、言語学の指導原理としての地位を持つことに対する激しい批判的な態度がはっきりと表れてくるのである。言語学はそのまま日本に輸入されて自然科学のようなものと同様に適用できるものではなく、それには「刺激」、「助言」、「示唆」³⁾ の役割しかないのである、と考える時枝は、言語学が指導原理という地位を認めないと同時に、ヨーロッパの諸言語が普遍的であって、日本語は特殊であるという考え方が間違っているのを指摘し、日本語はヨーロッパ諸言語と同様に、言語学に於いて研究対象として十分な資格があることを説明した。氏は「一切の特殊現象、その中に同時に普遍性を持つと

いうことは、国語においてばかりでなく、一切の事物について云い得ることである。」⁴⁾と考えている。これは哲学上から見ても、正しい考え方であると言わざるを得ない。こういう考え方は、特殊性と普遍性との辯証法的関係を明らかにしたばかりでなく、ヨーロッパ諸言語に対する日本語のインフェリオリティーコンプレックスをも批判した。

時枝は言語学を日本語研究の指導原理とするのは、日本語研究の在り方ではないと主張する一方、日本語研究は日本語そのものからしなければならないと指摘したのである。氏にいわせれば、対象を考察する前に、方法論というものが規定されるのは科学的な研究方法と考えられないのである。時枝の言語研究の態度は考察第一義の態度といってもさしつかえない。もちろん、氏自身のいう通り、その態度自身はすでに言語研究の方法論と見ることができるのである⁵⁾。

ところで、時枝のそういう態度、すなわち時枝の具体的な方法論は何かというならば、これは国語を具体的な対象として考察して来た我々の先行学者の研究を基礎とし、これら国学者と称する先行学者の研究を理論的に再構成し、その矛盾を摘発し、その学説理論を発展させてこれをいまの研究の出発点とすることである⁶⁾。したがって、言語学と対照的に、時枝にとっては国語学史の研究は並ならぬ重要な意義を持つのである。「国語学史は、国語学の体系を建設するに必要な一つの方法論的実践としての意義を持つものである。」⁷⁾このように見て来れば、言語学の方法論に於いては、時枝の言語理論と、通時言語学に対する共時言語学の優位を説くソシュールの言語理論との間に、著しい相違が出て来たものである。ソシュールにしたがえば、話手にとっては言語事象の歴史性は存在しないものである。歴史の介入は自分の判断を狂わすだけである。それは恰も、アルプスの全景を画こうとして、ジュラ諸峰から同時に見渡したところで、意味をなさない。全景はただ一点から画くべきである。言語にしても同様である。ある一つの状態に身をすえないでは、これを記述することも、使用の規範を定めることもできない⁸⁾。これに対して時枝は、国語学史は「国語学の発展と不可分離の関係にある。」また「国語学の真義が、国語意識の理論的体系であるとするならば、国語学史は国語意識の展開の歴史であるということが出来、我々がこの過去を継承して、新しい発展を試みるに、今日以後の国語学が建設せられるのではないかと考えたのである。」⁹⁾と認識している。事実、時枝の言語過程説は、その源流を江戸時代の国学者である本居宣長や富士谷成章及び鈴木朗などの研究に、さらに《万葉集》の注記¹⁰⁾並びに《手爾葉大概抄》などの文献にまでさかのぼることができる。たとえば、言語過程説の中心内容である詞・辞分類については、《手爾葉大概抄》の中に「和歌手爾葉者唐土之置字也、以之定輕重之心、音聲因之相統、人情縁之發揮也。」そして「詞如寺社手爾葉如莊嚴、以莊嚴之手定寺社之尊卑。」とあるのがそれである。

要するに、時枝が国語学史の研究を日本語研究の先決条件と位置づけたのは、これを以て氏の言語学への抵抗手段としたのではないかと思われる。なんとすれば、氏としては言語学に対して、はなはだしい疑問を持っているからである。氏はつぎのように指摘している。「徒らに言語学に追隨するとしたならば、言語学は国語学に他山の石となり得ないばかりか、むしろ国語学の自立発展に大きな阻礙とならないと限らない」¹¹⁾。ここから、言語学の国語学に対する得よ

りも損の方が遥かに多いというのが、氏の執念であり、また結論であることは容易に見られよう。これと同時に、国語学史の研究は氏にとっては方法論的な意義を有するものであるといつてよからう。だから、こうした言語研究態度及び方法論によって作り出された言語理論については、時枝が「言語過程観は日本の古い国語研究の中に培はれた言語本質観であって、それはヨーロッパに発達した言語構成観に対立する全く異った言語に対する思想である。」¹²⁾と明言しているのは、以上の分析を^{たど}って考える限り、よりどころのない話ではないことがわかるであろう。そしてまた、氏がヨーロッパ言語学の代表的なものであるソシュール理論に対して批判の鋒を向けたことも、さほど理解に難しいことでもないことになるであろう。

二

時枝の言語理論の全体を眺めれば、多少排外的な傾向があるのも、またソシュール理論をある程度誤解しているのも事実ではあるが、だからといって、これは、唯我独尊で排外主義的であると直ちにいえないうし、同時に氏のソシュール批判の基本的な原因であると断言することもできない。氏のソシュール批判は、前にも述べた理由のほか、主として日本の古い国語研究を基礎にし、その継承と発展とを宗とした言語過程説と、ソシュール言語理論との間に、理論的構造の根本的な相違が存することによるものである。或いは排外的な思想やその他が氏のソシュール理論に対する誤解を生じる一因となったかもしれないが、しかし、なんといっても、この二つの理論の間に根本的な相違が存在することはとうてい無視できないものである。

それでは、この二つの理論を対比してみたところ、いったい、最初にどういう点に於いて対立が存するかをいうならば、これが言語研究の対象は何ものであるかということである。この点に於いては、時枝もソシュールもその対象を把握することは極めて困難なことでありと指摘している。ソシュールが「言語の十全で同時に具体的な対象はなにか？ これはかくべつむずかしい問題である。」¹³⁾といっているのに対して、時枝は「言語研究の究極の課題が、言語の対象としての本質を明らかにするにあるといったことは、これを別の言葉でいうならば、言語研究に於いては、その対象を確実に把握することが極めて困難であるということに他ならない。」¹⁴⁾といっている。

それゆえ、時枝にしてもソシュールにしても、問題がその把握することの難しい対象のとらえ方にあることになるのである。そこで、まずソシュールの対象のとらえ方について見よう。ソシュールは、言語学の対象は、他の科学のそれと同じように、前もって与えられたもので、これをいろいろの観点から眺めることのできるものではないと指摘している。氏はその対象が観点到先立って存在するのではなくて、いわば観点によって対象が作り出されるものである。そして、どの見方をとるにしても、その言語事象はたえず二面性を呈する。それらはあい対応し、ともに相手なしでは価値のないものであることを発見した¹⁵⁾。ソシュールにしたがうならば、観察によって得られた二面性を呈するものは、言語学の研究対象になり得ないのである。というのは、もしこの二面性を呈するものの一面にのみ固執するならば、二面性を見失うおそれがある。そしてまた、もし数面から研究するならば、もう言語学の研究そのものでなくなる

のである。たとえば、言語事象の一つとしてのランゲージュ (Langage) をとって見ても、とうていその統一性を発見することはできない。「言語活動は、ぜんたいとして見れば、多様であり混質である、いくつもの領域にまたがり、同時に物理的、生理的、かつ心理的であり、なおまた個人的領域にも社会的領域にもぞくする：それは人間の事象のどの部類にも収めることができない」¹⁶⁾。そして、もし個人個人の言葉であるパロール (Parole) を対象としたならば、どうであろうか。それも依然として統一性がない。それは言語活動の個人的部分であり、意志と知能の個人的行為であって、やはり精神的物理的の二面性を呈する。かつ無数というほどのパロールを集めて観察することも至難である¹⁷⁾。したがって、ソシュールに言わせるならば、言語学の研究対象は等質的なものでなければならないのである。そうすると、言語事象を観察することによって、対象を把握することができないのも明白であるので、別の方法によって対象を把握する。端的に言えば作り出さねばならぬことになるのである。そこで、ソシュールはラング (Langue) を案出したわけである。要するに、ラングと言うものはランゲージュやパロールとは違って、等質的であり、対象になり得るものである。その詳細についてはあとで触れることとし、ここでひとまず時枝の対象のとらえ方を検討してみよう。

時枝の対象のとらえ方については、対象の等質であることを要求しない点から、ソシュールのそれと異なってくることはまず疑いはなからう。時枝の場合は、むしろ対象が混質的であってもかまわないのである。氏においては、対象を限定、端的に言えば作り出すのではなく、ただその元来不明瞭漠然たる対象の輪廓を明らかにするところに第一義が存するのである¹⁸⁾。すなわち、対象は何ものであるかぜんぜんわからないのではなく、ただ曖昧にしかわからないのである。はっきりわからないことは、対象の本質をまだ説明していないからである。だから、時枝の対象のとらえ方はソシュールのそれと相違して、何かを作り出して対象と設定するのではなくて、いかに対象の本質を説明するかということなのである。そこで、時枝は対象を考察する前に方法論が規定されないと主張していながらも、対象そのものの本質をまず一応説明しなければならない。これはほかでもなく、「最初に対象の本質をしっかり見通すことである」¹⁹⁾。対象を見通すことによって、対象の本質に対する見通しが生じるわけである。ただし、ここで注意しておかなければならないことは、その見通しは最終的に対象を定義することではなく、対象を考察しやすくするところのものにすぎない。時枝自身が言明したように「勿論この見通しは、対象についての省察が進展すると同時に訂正せらるべき性質のものであるかもしれないが、その故に、かかる見通しが不必要であるということは出来ない。国語学は寧ろかかる対象の本質の不断の改訂によって次第にその目標に到達することができるのである」²⁰⁾。このような理論的展開は、対象の本質を明らかにすることが言語研究の出発点であると同時に、その究極的課題または到達点であることを語っている時枝の立場から考えれば、理解することができよう。

そこで、時枝の対象の本質に対する見通しは何かと言うならば、これは言語を人間行為の一形式と見做すことである。この人間行為はすなわち「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」にほかならない²¹⁾。いいかえれば、このような主体的活動と呼ばれるものは対象なのであ

る。この主体的活動を説明することができれば、対象の本質も明らかにされるのである。

以上の分析を通して見れば、ソシュールと時枝との対象把握及び対象そのものが相違していることが大体明らかになることであろう。ソシュールの場合に於いては、広い意味での「言語」には、ランゲージュとラングとパロールとがある。その中で等質的であり、統一性を呈するのはラングだけである。研究対象が等質的でなければならないことに固執するソシュールは、ラングを言語学の第一義の研究対象としたのである。これに対して、時枝はつぎのように批判している。我々の最も具体的な対象は言語活動である。「我々の具体的な対象は、精神物理的過程であるにもかかわらず、それをそれとして把握せずにして、混質であることを理由として、他に等質的な単位要素を求めようとすることは、明らかに対象よりの逃避であり、方法を以て対象を限定したことになるといわなければならないのである」²²⁾。この批判の当否を一応問わないことにして、時枝がソシュールの対象把握及び対象そのものを否定する態度は明白なことである。

時枝は「言語活動は最も具体的な対象である。」²³⁾ といっているが、氏が研究対象として示すところの言語活動が、ソシュールのいうところのランゲージュと同一なものであるかどうかということを一時的に判明することはできない。しかし、時枝は自分のランゲージュに対する理解に基づいて、むしろ、ランゲージュを研究対象とすべきものであると考えているのであることはまず間違いないであろうと思われる。その一方、もし、ランゲージュ、ラング、パロールという三つの「言語」が全部実在するものであると仮定することができれば、時枝が独り合点のランゲージュを言語研究の具体的な対象とすべきであると考えのに対し、ソシュールはランゲージュから、ラングとパロールを切り離して、対象として把握するのであるといえよう。これは、或いは時枝がソシュールが自然科学の物質的構造分析方法を言語研究に導入したのである、と批判する一因となったのであろう。事実、ソシュールは「言語活動の研究は二つの部門をふくむ：一は、本質的なもので、その対象は言語である。これは本質的において社会的であり、個人とは独立のものである。この研究はもっぱら心的である。他は、二次的なものである。その対象は言語活動の個人的部分、すなわち発聲をふくめた言である：これは精神物理的である。」²⁴⁾ といっている。このように見て来れば、ソシュールに於いて、言語研究の対象はラングに限らず、またパロールも対象なのである。勿論、実際にはソシュールはパロールの言語学を説かなかったのである。その原因が病気のためであったかどうかははっきり知るべくもないが、しかし、ソシュールが、対象が質的区別こそあれ、言語研究の対象としてはラングとパロールとがあるということを認識しているのは事実である。

ところで、時枝が対象とすべきであるところの言語活動は、氏の理解では、また氏の言葉でいえば、これは主体的活動である。というのは、時枝は「言語活動とは、ソシュールのLangageの訳語である。言語活動は心理的生理的現象を伴う處の我々の最も具体的な言語経験である。」²⁵⁾ というふうに、ランゲージュを狭く理解したのである。ただし、時枝が理解したところの言語活動すなわち主体的活動と、ソシュールのいうところのランゲージュとの間にイコールを画することはできないと思うのである。なんとなれば、ランゲージュが一般に言

語活動と理解されたところの内容は、主体的活動の内容より遥かに広いのである。それには社会的な側面も有するのである。だから、時枝は事実上、ランゲージを自分なりの理解によって主体的活動として取り扱っているのであるといえよう。

そこで、もし時枝の対象が一体どういうものかを追究するならば、氏の言葉を借りた方が便利だと思う。氏は「我々の観察の直接にして具体的な対象になるものは、若しソシユールの名称を借りるならば、精神物理的パロール循環であって、それ以外のものではない。」²⁶⁾ といっている。精神物理的「パロール循環」は、勿論ソシユールのパロールと同じものではない。これはもし時枝の名称を借りるならば、「主体的パロール」ということになるといつてよい。おかしいと思われるかもしれないが、これより別のいいようもないのである。ということは、学術用語の面に於いても、時枝の用いるものとソシユールの用いるものとは、含意的にだいぶ相違しているからである。その根本的な原因は、要するに、構造主義の開基であるソシユールが言語を物(心的物にせよ物質物にせよ)として取り扱っているのに対立して、日本の伝統的な国語学の継承と発展を宗とする時枝は、言語を事として取り扱っているのである。時枝のそういう言語観は、何となく日本古代の「言は事なり」の思想を反映しているかのように連想をさせられるものである。

以上の推論を辿って見るならば、言語本質観に於いては、ソシユールと時枝との対立は、言語が人間に外在するものであるか内在するものであるかということになるのであると考えてよからう。率直に言えば、言語は人間の用具であるか人間の機能であるかという対立である。そこで、両氏の言語本質観における対立は、ラングというものに焦点を絞られてくるわけである。

三

いかに言語の本質を説明するかということは、言語学の第一義の任務であるに違いない。ソシユールにしても、時枝にしても、まさにこのように問題を認識しているのであるし、またさらに両氏とも言語本質の説明に骨折ったのであるといえよう。

ソシユールは言語事象をどう観察するにしても、混質的な、二面性を呈するものしか発見できない結果から、「ある科学がただちに認識することのできる具体的単位を呈しないときは、それがそこでは本質的でないからである。」²⁷⁾ という判断に至ったのであろう。そこで、ソシユールはラングを以て言語の本質を説明しようとするわけである。ラングというものをつきつめていうならば、これは言語記号にほかならない。ただし、この記号は概念と聴覚映像との結合で、記号のこの二部分がひとしく心的であることを念頭におかねばならない。ラングはランゲージに対して、前者はそれぞれ個別社会において顕現されたものであり、その社会固有の独自の構造をもった制度である。後者は人間のもつ普遍的な潜在の言語能力及びその諸活動である。そして、ラングはパロールに対して、前者はコードであり、後者はラングを実現した個人的なものにすぎず、あくまでもラングにとってはデーターとしての意味しかあり得ない。その意味で、ラングこそランゲージやパロールと峻別した後の社会的な部分または本質的な部分であることがわかるのである。時枝はしかし、ソシユールのラングそのものについて、その成立を

否定するのである。時枝の理由は、第一に、それは自然科学的な原子的構成論、すなわち自然科学的な方法論に禍された結果である。第二に、聴覚映像と概念とが結合したものではなく、聴覚映像が概念と聯合すること以外にはない²⁸⁾。だから、それは単に心的ではなく、やはり心理的・物理的である。時枝が概念と聴覚映像を認めないのではなく、それらによって結合したものを認めないのである。時枝のあの有名な言語過程図にも、聴覚映像——概念、概念——聴覚映像という二つの段階を含んでいるが、これは主体的活動によって互いに喚起^{かんき}するところの二つの過程の段階であって、一体に結合したものでは決してない。要するに、この点に於いても、言語はことであるかそれともものであるかという、時枝とソシュールとの対立がはっきりと見られるのである。

思うに、時枝がラングの成立を認めない根本的な原因は、主体的連合作用の存在が何よりも重要であると考えているからである。ソシュールが言語の本質をラングに求めたのに対して、言語を人間行為と考える時枝はこれを主体的作用に求めた。言語が主体的活動である以上、「言語の本質的要素は、素材を伝達し得る様に加工変形さす主体的な機能の上になければならない。そこで私は、言語に於ける本質的なものは、概念ではなくして、主体的概念作用にあると考えるのである」²⁹⁾。それに関しては、ソシュールの場合においては、人間の機能を認めないでもないが、ただ言語の本質は人間の機能に帰することができないと考えるだけである、ラングができあがるのは、受容的、同位配列の能力の働きによる、とソシュールも認めている一方、しかし言語の本質は話手の機能ではなく個人が受動的に登録したラングである、と指摘している。言いかえれば、ソシュール理論は時枝理論がいう主体的機能を全部認めた上、さらにそれによって生じたものは何かを求めたのである。その結果、ラングというものが得られたわけである。それと反対に、時枝の場合では、言語の本質を人間の機能にとどめただけであるといっても不適當ではなからう。

なお、ソシュールは言語の本質を説明できる最も重要な方面と思われる言語の社会性をも、ラングを以て説明している。たとえば、パロールとしては、個人個人が全部違っているが、どうしてその個人個人の言語が互に通じ合えるかという問題になると、それはラングの働きによるのである³⁰⁾と説明される。この点について、時枝はソシュールを誤解していると言わざるを得ない。なんとなれば、時枝はラングの性質を、ラングがパロールにおいて限定されるものであるかのように理解しているのである。すなわち、ラングは非限定的であり、パロールは限定的である。時枝がいうには、ある老人が息子に死なれて、「私は杖を失った」と言った場合、この「杖」というラングがどうして「息子」の意味に限定されるのであろうか、というように質問する。これは時枝がラングを理解していないからである。この場合の「杖」はパロールであって、ラングではない。というのは、ラングは特定の個人の言葉ではもちろんなく、また、一つのパロールに対応する一つのラングがあるということでもない。ラングは「同一社会にぞくする話手たちのうちに貯蔵された財宝であり、各人の脳のうちに、より精密に言えば、一団の個人の胸のうちに、陰在的に存する文法体系である」³¹⁾。もしラングの受限定性を議論するならば、話手に対しても聞手に対しても同様である。ラングは一つの制度であるから、話手の老

人が「私は杖を失った」と言った場合、ラングが実現したものであり、そして、聞手がこれを聴取する場合、ラングを個人が使用したのものであるということができると思う。したがって、時枝が一言言葉をパロールであると同時にラングでもあると考えることは誤りである。そしてまた、ラングに対する時枝のもう一つの誤解は、ラングが聴覚映像と概念が一体に結合したものであるならば、言い間違いの現象はどう解釈するかということである。たとえば、ある人が黒をシロと言い間違ったり、白をクロと言い間違ったりするのはどうしてなのであろうか。はっきりというならば、こういう現象は正にソシュールの言語記号の恣意性を証明するものである。そもそも、黒をシロと言ったり、白をクロと言ったりするのは別に絶対に許さないものではない。それにまして、ある一人の人が黒白を混淆したといって、それはラングに対してなんらの妨害もないのである。もしラングを楽譜にたとえられれば、ある一人の演奏家が楽譜を演奏し間違ったことがあっても、楽譜の責任であるということがまったくできないのである。言いもどすならば、「杖」という語がどうして「息子」の意味になるのかは、ソシュールの理論では、これは第二の恣意性、すなわち価値の恣意性によるものである。このような現象について、時枝が「主体的な意味作用」³²⁾によるのであると解釈しているのは、時枝理論の特徴であると言えば言えよう。これは解釈の立場こそ異なっている、ソシュールの理論と矛盾するものではない。

ところで、時枝がどのように言語の社会性を説明するかということになれば、氏は相変わらずこれを主体的機能に求めたのである。氏にしたがえば、同一社会の成員中にはラングというものが存在することなく、同一の整序能力を個人がもっているからである。これはいわゆる習慣性³³⁾とも言える。しかし、習慣性を以て言語の社会性を説明しようとするのはいいかげんである。なんとなれば、習慣性というものはしばしばエチケットのようなものであると考えられないとも限らないのである。そしてまた、考えられることは、習慣性による言語使用は往々にして規範性を缺くもの、甚しきは誤ちである。そのほか、時枝は言語の思想伝達過程をつぎのように述べている。「我々は如何に既知な言語においても、音聲の不明瞭な場合には意義不通であり、思想の伝達過程は中断される」³⁴⁾。しかしながら、時枝のこの議論をそのまま用いれば、「我々は未知な言語に於いては、如何に音聲明瞭な場合にも、意義不通であり、思想の伝達過程は成り立たない」と言うことも十分できるのである。それは外国語の場合はなおさらそうである。日本人は日本語を話しかつ聞く能力を持っていても、中国語については、苦勞して勉強せずには、聞くことも話すこともできないことはいうまでもない。

一言でいうならば、時枝は何もかも主体的な機能を以て説明しようとするのである。これは時枝理論の一貫性であると言えば言えるわけであるが、しかし言語の本質の説明を単に人の機能作用にとどめるだけとするならば、言語は生具のものであると考えられ易い。そしてまた、人の機能作用を証明しようとするには、この機能作用を裏付けることのできるものを究明しない限り、主体的機能としての言語の特質も明らかにされることはないであろう。だから、時枝が、ソシュールの設定したラング、この主体的機能を裏付けることのできる性質をもつものを否定することは、その理論的構造の全体から必要なこと、或いは誤解に起因したことかも

わからないが、ほとんど失錯に近いことと思われるのである。

小論は言語過程説の理論的構造を、ソシユール理論のそれと対比することによって、この二つの理論の本質的相違を明らかにすると同時に、時枝のソシユール批判についての筆者なりの浅見を述べようと思うものであるが、それがどの程度まで事実の部分をついているかということについては、はなはだ自信がないものである。それに、小論は完全に日本語でしたためたものであるので、どの程度まで言い表したいことを正確にかつ十分に伝えられたかということも疑問である。と贅言しながら小論を終わりたいのである。

注

- 1) 服部二郎・大野晋・阪倉篤義・松村明編、日本語の言語学 第三巻、「文法Ⅰ」大修館、1979、p.26
- 2) 時枝誠記「国語学原論」岩波書店、1978、p.5～8
- 3) 時枝誠記「国語学史」岩波書店、1979、p.14
- 4) 前掲 時枝「国語学原論」p.9
- 5) 同前 p.3
- 6) 同前 p.8
- 7) 前掲 時枝「国語学史」p.10
- 8) ソシユール、小林英夫訳「一般言語学講義」岩波書店、1978、p.115
- 9) 前掲 時枝「国語学史」p.11～12
- 10) 「万葉集」巻十九、大伴家伴の詠霍公鳥の下注記。
- 11) 前掲 時枝「国語学史」p.13
- 12) 時枝誠記「日本文法 口語篇」岩波書店、1978、p.15
- 13) 前掲 ソシユール「一般言語学講義」p.19
- 14) 前掲 時枝「国語学原論」p.10
- 15) 前掲 ソシユール「一般言語学講義」p.19～20
- 16) 同前 p.21
- 17) 同前 p.19、p.29
- 18) 前掲 時枝「国語学史」p.9
- 19) 同前 p.8
- 20) 同前
- 21) 前掲 時枝「国語学原論」p.12
- 22) 同前 p.62
- 23) 同前
- 24) 前掲 ソシユール「一般言語学講義」p.33
- 25) 前掲 時枝「国語学原論」p.61
- 26) 同前 p.11
- 27) 前掲 ソシユール「一般言語学講義」p.150
- 28) 前掲 時枝「国語学原論」p.65～67
- 29) 同前 p.54
- 30) 前掲 ソシユール「一般言語学講義」p.26
- 31) 同前
- 32) 前掲 時枝「国語学原論」p.411
- 33) 同前 p.75～78
- 34) 同前 p.77～78

(原稿受理 1988年8月1日)